

「トクベツ」と日常

013 西武学園文理中学・高等学校 鉄道研究部

セミの雄叫びが降り注ぐ夏の朝。

まだ控えめなやさしい日差しのおかげか、緩やかな風が、肌にやわらかく流れてくる。

道を行き交うランナーと、尻尾を振りながら池のほとりを軽やかに進む柴犬。それぞれが残す足音が、目を覚ましたばかりの公園に小さなリズムを刻んでくれていた。

毎朝ここを歩く僕だけれど、夏のこの時間、この場所は、何度訪れてもどこか「トクベツ」なひとときだ。

渋谷からたった15キロほどのところに、こんなにも素晴らしい緑のオアシスがあるだなんて。

そんなことを思いながら、駅の改札を通る。構内に響く電子音が、公園の静けさから、ふと日常へと戻された合図のようだった。「まもなく、電車が参ります。」というアナウンスが、せわしなく人の入り混じるホームで流れ始めた。

今日も1日、頑張るか。

そう心の中でつぶやき、僕は渋谷行きの電車に乗った。

また明日、この「トクベツ」に会いに行こう。

日常というレールの、その先で。

